

# 感染症予防対策マニュアル

施設においては、感染症に対する抵抗力が弱い高齢者や乳幼児等が、集団で生活する場であり、限られた空間で感染が広がりやすい状況にあります。感染症は、感染自体を完全になくすことはできないことを踏まえ、感染の被害を最小限にすることが求められます。

そのためには、平常時から対策を実施するとともに、感染症発生時には、早期に異常を察知し、迅速で適切な対応を図ることが必要となります。

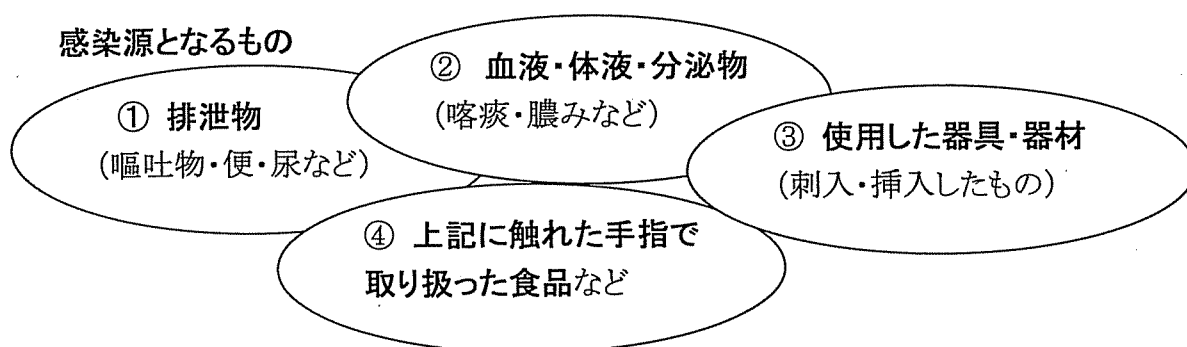
本マニュアルは、感染予防の基本的な知識を示したものです。各施設における実情を考慮しながら、具体的な対策を考える際の参考としてください。

## 1. 感染対策の基礎知識

感染症に対する対策の柱は、① 感染源の排除 ② 感染経路の遮断 ③ 宿主(人間)の抵抗力の向上 の3点です。具体的には、「標準予防策(スタンダード・プレコーション)」と呼ばれる感染管理のための基本的な措置を徹底することが重要となります。

### 1) 感染源の排除

感染源とは、感染症の原因となる微生物(細菌、ウイルスなど)を含んでいるものです。次のものは感染源となる可能性があります。



### (1) 標準予防策

「標準予防策」は感染症の病態に関わらず、すべての患者のケアに際して適用されます。

感染予防の基本戦略は、『手洗いに始まって手洗いに終わる』といわれるほど、手洗いが重視されています。血液、体液、排泄物などを扱うときは、手袋、マスク・ゴーグル、エプロン・ガウンの着用が必要になります。このほか、ケアに使用した器具、環境対策、リネンの取り扱い、針刺し事故防止などについて、次のような標準的な予防策が示されています。

- 血液・体液・分泌物・排泄物(便)などに触れるとき
- 傷や創傷皮膚に触れるとき

⇒手袋を着用します。手袋を外したあと、石鹸と流水により手洗いをします。

● 血液・体液・分泌物・排泄物（便）などに触れたとき

⇒手洗いをし、必ず手指消毒をします。

● 血液・体液・分泌物・排泄物（便）などで、衣服が汚れる恐れがあるとき

⇒プラスチックエプロン・ガウンを着用します。

● 針刺し事故防止のために

⇒注射針のリキャップはやめ、感染性廃棄物専用容器へ廃棄します。

## (2) 手洗い

手洗いは『1回のケアに1回の手洗い』『ケア前後の手洗い』が基本で、もっとも簡便で効果的な予防対策です。

手洗いには、①「石けんと流水による手洗い」と②「消毒薬による手指消毒」の2段階が必要です。

種 類		方 法
① 手洗い ⇒ 通常の手洗い・汚れのあるとき		普通の石けんと流水で手指を洗浄する。
②手指消毒 ⇒ 感染している、又は、感染しやすい状態にある人のケアをするとき	洗浄消毒法 (スクラブ法)	洗浄消毒薬を約3ml手に取りよく泡立てながら洗浄する(30秒以上)。さらに流水で洗い、ペーパータオルで拭き取る。
	擦式消毒法 (ラビング法)	アルコール含有消毒薬(擦式消毒薬)を約3ml、手に取りよく擦り込み(30秒以上)、乾かす。

## 手洗いのポイント

- ① 手を洗うときは、時計や指輪をはずす。
- ② 爪は短く切っておく。
- ③ 手洗いが雑になりやすい部位は、注意して洗う。
- ④ 使い捨てのペーパータオルを使用する。
- ⑤ 水道栓の開閉は、手首、肘などで簡単にできるものが望ましい。
- ⑦ 水道栓は洗った手で止めるのではなく、手を拭いたペーパータオルで止める。
- ⑧ 手を完全に乾燥させること。

### <禁止すべき手洗い方法>

- ・ベースン法  
(浸漬法、溜まり水)
- ・共同使用するタオル

## 2) 感染経路の遮断

感染経路には、① 空気感染、② 飛沫感染、③ 接触感染、及び針刺し事故などによる血液媒介感染などがあります。感染経路に応じた適切な対策をとりましょう。

### 主な感染経路と原因微生物

感染経路	特徴	主な原因微生物
空気感染	咳、くしゃみなどで、飛沫核(5 $\mu$ m以下)として伝播する。空中に浮遊し、空気の流れにより飛散する。	結核菌 麻疹ウイルス 水痘ウイルスなど
飛沫感染	咳、くしゃみ、会話などで感染する。飛沫粒子(5 $\mu$ m以上)は1m以内に床に落下、空中を浮遊し続ける事はない。	インフルエンザウイルス ムンプスウイルス 風しんウイルス レジオネラなど
接触感染(経口感染含む)	手指・食品・器具を介して伝播する。 最も頻度の高い伝播経路である。	ノロウイルス 腸管出血性大腸菌 MRSA, 緑膿菌 など

感染経路の遮断とは、

- ① 感染源(病原体)を持ち込まないこと
- ② 感染源(病原体)を拡げないこと
- ③ 感染源(病原体)を持ち出さないこと 　　です。

そのためには、手洗いの励行、うがいの励行、環境の清掃が重要となり、その基本となるのは標準予防策(スタンダード・プリコーション)と感染経路別予防策です。(感染経路別予防策については、主なものについてIV個別の対策で記載します。)